

通し番号	3717
------	------

分類番号	12-44-13-07
------	-------------

(成果情報名) 球根養成によるグロキシニアの栽培法	
[要約]グロキシニアの5月出荷は、前年の12月球根定植栽培により可能であった。同時期のは種では、生育が不足して不可能であった。なお、球根から栽培する場合、出芽時に一芽のものと二芽のものとが混じるが草姿に大きな違いが生じないため、摘芽の必要は無い。	
(実施機関・部名)	農業総合研究所 生産技術部 連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

グロキシニアは、花、茎葉など観賞性が高いものの、花持ちの点で難があり高値販売は期待できないが、市場への流通量も少なく、鉢物生産における裏作として施設の有効利用を図るには有望な作目である。慣行の栽培方法は9月には種、温室で栽培し、翌年の5月頃から出荷するが、神奈川県では、鉢物の主力作目であるシクラメンの仕上げ期と重なるため導入は難しい。そこで労力競合を避けるため、栽培方法を慣行のポット上げから、球根養成による栽培法を検討した。

[成果の内容・特徴]

1. グロキシニアの球根養成は、は種2月、鉢上げ6月、9月から雨よけ栽培、12月に掘り上げをする。
2. 12月下旬に育苗箱に定植する。掘り上げてから定植するまで、湿らせたパーミキュライト・鹿沼土混合培土に埋めて室温で保存する。球根の出芽率は98.8%と良い(表1)。
3. 球根定植後は2月に3号鉢に、4月に4.5号鉢にそれぞれ鉢上げをする。1月中は18℃、以後15℃に加温する。開花は5月である(表2)。12月には種した場合は、開花は6月となり、開花時の大きさは、球根を定植したものより小さい(表3)。
4. 球根を定植した場合、出芽は1芽と2芽が混じる。摘芽を有無により株径は変わらない(表4)が、葉枚数は2芽摘芽無し区が他区の2倍程度となる(表5)。草姿としては変わらないため摘芽の必要はない(図1)。
5. 摘芽の有無により開花数及び着蕾数に変化はない(表6)。

[成果の活用面・留意点]

1. グロキシニア球根養成栽培はシクラメン栽培の裏作として有効である。本試験はプールベンチにおいて栽培を行った。手灌水栽培及びプールベンチ栽培どちらにおいても、導入可能な作物として提案することができる。
2. 育苗期間が長いので、棚下栽培で行うと良い。
3. 経済性については、不明であり、市場動向に注意を要する。

[具体的データ]

表 1 球根出芽率と良品株率

項目	割合
球根出芽率	98.8%
良品株率*	93.0%

* 3号ポットに鉢上げした

表 3 作型別生育状況

作型	株長径	株短径	葉枚数	花数	着蕾数
	cm	cm	枚	輪	個
球根定植	26.7	23.4	12.6	1.6	21.3
は種	13.4	11.9	9.5	0.7	3.7

調査日 開花開始 1週間後 球根定植H13.5.21(蕾数のみ5.30)、は種H13.6.21

表 2 作型及び開花日

作型	は種	定植	移植(育苗箱)	鉢上げ		開花開始
				3号	4.5号	
				球根定植	H12.2.16	
は種	H12.12.12	-	H13.3.1	H13.5.2	-	H13.6.13

表 4 摘芽処理が生育に及ぼす影響 1 (株径) (単位: cm)

芽数	摘芽処理	処理後日数				
		処理日	4週	8週	12週	14週
2	有り	3.2	8.7	15.0	24.9	29.6
2	無し	3.6	9.0	15.0	23.0	27.5
1	無し	3.5	8.4	14.5	23.7	27.4

処理日は2月16日、14週間後は5月28日出荷ピーク想定

表 5 摘芽処理が生育に及ぼす影響 2 (葉枚数) (単位: 枚)

芽数	摘芽処理	処理後日数				
		処理日	4週	8週	12週	14週
2	有り	4.3	6.6	8.7	11.4	12.5
2	無し	8.1	11.6	15.1	18.7	20.4
1	無し	4.1	6.4	8.6	11.6	12.4

処理日は2月16日、14週間後は5月28日出荷ピーク想定

表 6 摘芽処理が開花数及び着蕾数に及ぼす影響

芽数	摘芽処理	処理後日数		
		12週	13週	14週
2	有り	0.3	2.0	6.6 (24.3)
2	無し	0.1	1.6	6.9 (25.3)
1	無し	0.2	1.8	5.9 (20.4)

()内は着蕾数 調査日は各々5月14日、21日、28日

図 1 摘芽処理が草姿に及ぼす影響



芽数 2
摘芽処理 有り

芽数 2
摘芽処理 無し

芽数 1
摘芽処理 無し

[資料名]平成12年度神奈川県農業総合研究所試験研究成績書(花き・観賞樹)

[研究課題名]新特産花きの検索および栽培技術の確立 グロキシニアの新作型の開発

[研究期間]平成12年度

[研究者担当名]益田泉 富田裕明